



【2017-01-11】

遊道楽歩（雑感）

書を友に、酒を楽しみ、
人生を味わう

今週の雑感

『冬の田んぼを歩く』

長野修二

冬の田んぼを歩く

私は冬の田んぼが好きです。

あぜ道も草が枯れ、広い田んぼの隅々まで散策できるからです。

とくに春から秋までは雑草が生い茂り簡単に散歩をする状況ではありません。

「まむし」やこの地では「カミツキガメ」などの生き物が生息しており、この季節に水田近くに踏み込むことはかなりの危険が伴います。

その点、冬の田んぼは広々としていて、しかも晴れていればすばらしい青空を眺めながら歩くことができます。



田んぼに続く水路、凍った草花、渡り鳥たち、葉っぱを落とした木々と夏にみれない風景がそこに現れてきます。





寒風吹きすさぶなかでは、人もおらず、このすばらしい景色を独り占めできることこそが最大の喜びでしょうか。

抜けるような青空だけでも天恵、土地や木々や雲などとのコントラストはまるで絵画のような美しさがあり、また日々違った色彩になるのですから、これほどの自然の贈り物はないのではないのでしょうか。



厳寒期ですが、水田の水路を補修したり、所々に「田起こし（耕起）」がされていたり、あるいは水田の区割りがよくわかることで田んぼのひとつひとつの表情が現れてきます。

近くに流れる川との関係や川の土手を歩きながら川と水田、さらに空の表情、、また風の感触を感じられるこの季節はとても楽しい時間でしょうか。



川の土手などは歩きたくとも、春から秋までは雑草に覆われて近づくことさへできないところでは。

この時期だけに見せてくれる表情は穏やかでゆったりとして時間が止まったような感じさへすることがあります。

ゆっくりと寝そべっていたいとさへ思いますが、まともな寒風に早々に退散させられてしまうのが残念です。

お正月の都会の風情も結構よいものですが、いかんせん三が日が過ぎるとあっという間に人と車の喧騒が戻ってきてしまうことで、のんびりとした日々から追われるような日常になってしまうのが残念なところでしょうか。

その点この地の環境は、四季を通じてゆったりとした時間の流れがあり、その時間の流れを上手に作ってくれているのは水田と水稻の御蔭のようです。

春3月になると本格的な田起こし（耕起）と代掻き（しろかき）がはじまり徐々に水田が造られてきます。

水田が出来上がると、もう5月だなあと体が感じ、そろそろ田植えがはじまることを予感させてくれます。

秋までは稲の成長とともに日々の生活が流れていき決まったコースで散歩することになりますが、水田を潤す水路の力強い水の流れ、稲の成長とともに上空を飛び交うつばめたち、あるいは水田で水浴びをするカモたち、そしてあぜ道の蝶たちと、そしてそれらを優しく包んでくれている稲穂たち、また風にたなびく稲穂の様子が心に多くのやすらぎを与えてくれるようになります。

稲刈りが終われば、生き物たちも水田を去り、稲穂とも別れ、ただただ殺風景な景色が広がりますが、新たな生き物が静かにやってきます。

稲の成長は古来より日本人を支えてきた基本的なリズムをもっているのかもわかりません。

四季とともに稲作があることから日本の自然環境は成り立ってきたのでしょう。遠い遺伝子を自分の体を感じるのは田んぼへいくときのわくわく感のようです。子供のころ、田んぼはまさに遊び場そのものであり、まさにちびっこ天国だったのです。

田植えが終われば生き物たちを取りに行く場であり、稲刈りがおわれば稲わらのうえですもうをし、春になればレンゲ草のうえで寝転んだり、田んぼは子供の遊びを通した成長の場そのものだったようです。

今日もこのわくわく感が私を田んぼへ連れ出すのかもわかりません。